

---

# 神様のクリスマス

柊鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様のクリスマス

### 【著者名】

Z8957F

柊鏡

### 【あらすじ】

クリスマスをじょとこつものだから、俺は仕方なく従つた。

## 神様のクリスマス

クリスマスをしようといつものだから、俺は仕方なく従つた。ハンズから各種イルミネーションやら何やらを買つてくる。そして、彼女に渡した。

俺にクリスマスをしようとのたまつた彼女は、ははんははんと頷きながら俺の手から紙袋を奪つて、「エコバッグくらい持てば」とかわけの解らないことを言つた。

変な顔を俺がしていたのだろう、彼女は目を細めて、「エコ」と言つた。

「で？」

「エコしないヤツには山ノ神の祟りが訪れるだろ」と物騒なことを言つて、俺を蹴つた。非情に理不尽だ。

金的にダメージ受け、うすくま蹲る俺。

彼女は鼻を鳴らしながら、うつすら雪の積もつた山へ消えた。もみの木でも用意するのだろう。

俺は社務所を過ぎて、自宅へ向かつた。

俺の家は神社である。そう、神社だ。

神社なのにクリスマス。

既に初詣に備えて、神楽の準備やらで忙しいのにクリスマス。あいつはアホウなんじやないかと思う。

そりや、新年とクリスマスが時期的にズレていれば神社だってクリスマスの行事をするのも吝<sup>あぶ</sup>かじやない。

俺は実家を継ぐ気なんてサラサラないが、手伝いをしなくてはいけない。

たとえば、破魔矢つくりとか。

「おい。おいいい

背中を叩かれた。

「なんだ。おまえ、山にいつたんじゃなかつたのか」「よく考えてみると、神木でもいい気がした」

「」神木は本殿の裏手にある。

ひつそりとした鎮守の森にあり、まさか、あれをイルミネーションでぎんぎらぎんにしてしまつというのだろうか。

「やつそつ。ぎんぎらぎんにするのだ。さりげない地味な神木をぎんぎらぎんにわざわざなくするのだ」

「」  
「古い歌だな……」

「私は紅白好きだからな」

「近藤真彦つて紅白出たのか？」

「」  
「さあ」

「さあじゃねーよー。三十年近く前の歌とか、二十台の俺が知つてるわけがねえ。てめえのよくな、オバサ」

「うつさいなあ」といや、俺の弁慶の泣き所を蹴つてくる。おばさんだらう？ おまえ、おばさんだらう？ いや、年齢的にはおばあさんだらう？ だつて、おまえ、神様だらう？ 何百年も生きているんだろう？

彼女は神様だ。

真名は誰も知らない。だから、おまえとか、おい、とか呼ばれている。主に、俺が。

富司の親父は、単に神様とか言つてゐるが、実に胡散臭い存在ではある。

見た目、口りつ娘だし。

「ところで、訊いていいか？」

「いつてみて？」

「神様なのにクリスマスするのか？」

「モチのロンだ」

「やっぱり、おまえ、センスが古い」

「ナウイではないか。実にナウイ」

### 「ナウいとか死語」

実際問題、何百年というスパンから見れば三十年前もついこのあいだなのかもしないが。

俺は実は知っていた。

彼女がクリスマスをしよう、などとのたまつた理由を。

彼女は神様だが、別に奇跡を起こせるわけもなく、単に不老不死なだけだ。

最初は俺も信じていなかつた。しかし、俺が十年経つて大人になつてもあいかわらず口りつ娘のまんまなので、信じざるを得なかつた。

「さあ、飾りつけをするかー！」

俺をひっぱつていく。

クリスマスをすると言つておきながら、飾りつけの仕方もしらないようなので、殆ど俺ひとりで飾りつけを終えた。

なのに、こいつは凄く達成感のある顔をしている。  
むかついたので、頬をつねつた。

「いひやい

「働け」

「働いてるからっ！」

「働いてないだろ。願い」とも叶えられない神様のくせに「うつと彼女は言葉に詰まる。そして、哀しそうに顔を伏せた。  
「だから、クリスマスをするつて言つたんだから」

そうだとぞ。

イブの夜。数名が神木の前に集まつていた。氏子ではない。

彼女が連れて来いといった人物を俺が連れてきた。

神木の下にはプレゼントが山積みになつていた。

一つ一つのプレゼントを彼らに渡して、ターキーを食つて、楽しんだ。

存外、面白かつたが、全ての費用が俺持ちなのだけが心苦しいと

「いや、やっぱり、理不尽なのだつた。

参加した人々が帰つた後、彼女はしみじみと言つた。

「いいことしたなあ

「気に病んでたんだろう?

「む?

「願い」とされても、叶えられないから

図星をつかれ、うろたえてから、彼女は俺を見た。

「まあ、そうだよ。あの受験生

パーティーで俺が参考書の束を渡したやつだろ。

「毎日のように合格祈願に来て、一円玉を投げるんだ

「一円つてケチだなあ

「何を言つかっ!」と、唐突に怒られた。「数十円で炭鉱が買えるのだと。どれだけ、あいつが熱心に大学合格を……」

「待て。おまえ、センスが旧いのはいいが、経済感覚が旧いのは正直どうにかしてくれ。今回のパーティー費用いくらかかつたと思つてる?」

「一錢くらいか?」

「五万六千七百十一円」

俺はレシートを見せてやつた。

神様はあんぐり口を開けて、俺を見ると、すぐに身を翻<sup>ひるがえ</sup>し山へ消えた。

「ちょ、待て。逃げんなっ!」

名無しの神様はほとぼりが醒めるまで、山から降りてこなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8957f/>

---

神様のクリスマス

2010年12月31日18時55分発行